

第1章

はじめに

平田 光司

hirata@soken.ac.jp

総合研究大学院大学教育研究交流センター教授

本報告は、2002年11月30日に開催された、ミニワークショップ「エネルギー問題としての核融合研究」のまとめである。より正確に内容を表現するために、本記録では「エネルギー開発としての核融合研究」とした。

ミニワークショップ開催の準備として、研究会メンバーであり、総研大核融合科学専攻・核融合科学研究所の井口春和、笹尾真実子（現東北大学）両氏と平田で準備的な会合を持ち（2002年7月17日、名古屋）、さらに、8月31日から9月1日にかけて、笹尾真実子、井口春和、高岩義信、横山 広美、板橋 隆久、吉岡正和、田島輝彦の面々に集まっていたいて（熱海）、ワークショップの枠組みについて議論した。「エネルギー問題としての核融合研究」というタイトルはそこで決まったものである。

ワークショップ開催の目的は核融合開発の現状について、他分野の研究者に理解できるように総括し、ITERの日本誘致をめぐる議論にも提言がおこなえるようにしたい、という「勉強」を主体にしたものだった。この総括を、エネルギー源開発の観点から行うことが重要であるとの考えが、ワークショップのタイトルに現れている。これは「プラズマ物理学の進歩」とは別の次元の問題である。

核融合の隣接分野ともいえる高エネルギー物理学においては、高エネルギー実験のための装置、加速器の開発研究が行われている。高エネルギー加速器もプラズマ燃焼装置も、ある目的のための大型科学装置であるので、加速器研究者は核融合装置の開発について、かなり意見を出せるのではないかと、ということで、吉岡正和氏にも参加を要請し

た。

核融合にかぎらず、ある分野の研究者がその分野について議論するのは、非常に難しいものである。専門化同士では相互批判をしても、外部には統一見解のようなものしか出さない、というパターンは、多かれ少なかれ、すべての分野に共通するものであろう。核融合科学の今後の発展のためには、それではいけない、という反省が本ワークショップの企画につながったものである。さいわい、ワークショップにも、核融合研究の当事者に多数参加していただき、公式の統一見解とは異なる、さまざまな意見をきくことができた。

共同研究「科学と社会」は2002年度で終了したが、本ワークショップの成果はなんらかの形で生かしていけるものと思う。